# 久間清俊教授への献辞

総合管理学部長　松　岡　　泰

個人的なことから話をはじめさせて頂きますと、私は熊本県立大学総合管理学部が発足した年の1994年に本学部に赴任したが、研究室は新築の総合管理学部棟５階にあり、たまたま久間先生の隣でした。そういう関係で久間先生とは毎日のように顔を合わせ、短い雑談をかわしました。温厚な人柄の久間先生は優しい態度で毎日声をかけてくださったが、久間先生とかわすこの短いが日々の挨拶は、25年ぶりに故郷に戻り、大学に１人も知人がいなかった私にとっては、心温まる憩いの時間でした。たまに事務的な用事があって先生の研究室にお邪魔すると、久間先生は文字通り本とファイルの山に埋もれておられ、その山の奥から顔を出されるのが常でした。そしていつも、白いワイシャツを腕まくりされていました。

久間先生の経歴を簡単にご紹介しますと、先生は1944年の佐賀県のお生まれで、京都大学経済学部に進学され、九州大学大学院へと進まれました。その後、九州大学経済学部で助手をされ、1976年に鹿児島経済大学（現在の鹿児島国際大学）経済学部に講師として赴任されました。1981年には本学の前身である熊本女子大学生活科学部に着任され、1994年に新設された総合管理学部に移られています。

ところで、久間先生は、世代的には日本がまだ高度経済成長する前の貧しい時代に少年時代をおくられました。そして学生時代は冷戦の最中のイデオロギーの時代であり、安保闘争に象徴される「政治の季節」のまっただ中で、しかも街全体が学生街で学生運動が激しかった京都という地で、学生時代を過ごされました。先生が『資本論』や『共産党宣言』などの著者であるカール・マルクスの思想に遭遇し、強烈な刺激を受けられたとしても、それは自然の成り行きでした。マルクスは資本主義社会の経済的メカニズムを構造的に描き出し、

それを歴史の発展段階の中に位置づけましたが、久間先生もこの種の問題意識を正面から受けとめ、研究者になられてからも、それこそ執拗にマルクスの思想と「対話」ないしは「格闘」し続けた方である。

現代の研究手法は、可能な限りデータや統計等を駆使して、現象を表面的に削り取って描写ないしは記述していく実証主義が主流であるが、久間先生はそうした時流に与せず、絶えず移ろいゆく現象の背後に潜む法則性、いわゆる歴史的法則性を頑なに追求されます。これだけ変化が激しい時代にあってそうした研究の姿勢を貫くのは困難を極めますが、久間先生は「どこからどこへ」、「資本主義社会はどこへ向かうのか」を、マルクスとウェーバーに依拠しながら、一途に追求されてきました。先生はひたすら研究室にこもり、読書と思索にふける日々を、退職されるまで送られています。『近代市民社会と高度資本主義―ドイツ社会思想史研究―』は、久間先生の長年にわたるこのような思想的営為の産物です。先生は1986年から１年間、海外留学をされましたが、そういうご専門の関係で当然の事ながら、留学先は当時の西ドイツ、ドイツ連邦共和国（ドルトムント大学）でした。

久間先生は本来はマルクスやウェーバーといったドイツの思想家を中心に据えて研究されていましたが、近年にはアダム・スミスからケインズに至るイギリスやアメリカの経済理論家も射程に入れ、研究の視点を福祉国家論や社会政策論にも広げられたように思えます。それと同時に、最近では学問を社会に還元したいという思いから、労働問題や雇用＝失業問題、具体的には日本型雇用制度とその変化にも関心を持たれ、この種の審議会などには積極的に参加され、発言されています。

また退職される前の６～７年間は、先生は院生の教育に全力を投入されていました。院生の中でも外国人を指導学生として引き受けると、言葉のハンディキャップが大きいため、論文指導と並行して日本語の訓練や修正に膨大な時間を割かざるを得ませんが、久間先生はそれを承知で外国人の院生をお引き受けになり、黙々と指導されていました。その姿が，忘れられません。

大学運営との関連で言えば、熊本女子大学は1994年に熊本県立大学に改組さ

れますが、改組される前後のそれぞれ１年間、すなわち1993年から1995年にかけて久間先生は学生部長という要職に就かれ、教養の全学共通科目のカリキュラムを編成する中心的存在として活躍されました。さらに2000年４月から２年間、先生は総合管理学部の学部長として学部の発展に寄与されました。久間先生は永尾孝雄教授（1980年着任）、米澤和彦教授（1981年着任）、中宮光隆教授、石橋敏郎（1982年着任）、松尾隆教授（1985年着任）と同じく、熊本女子大学の生活科学部から熊本県立大学の総合管理学部へと移籍されたいわゆる移行教員のお一人である。久間先生は移行教員として大学内に人的ネットワークをお持ちでしたので、学生部長や学部長をされるのにはまさに適任で、学部の運営と発展にご尽力されました。

既に紹介しましたように、久間先生は研究室ではマルクスやウェーバーといった「知の巨人」と日夜悪戦苦闘をされており、言葉の良き意味での「古典的な学者」です。先生は一方では研究者としてこのように非常に厳しい禁欲的な生活をおくられましたが、しかし研究室を一歩離れると、そういう雰囲気はおくびにも出されず、きわめて穏やかに人に応対されました。ですから先生は学生の間ではその温厚な人柄で知られ、「仏の久間」といった愛称で呼ばれ、慕われていました。また久間先生はいつも微笑みながら「いいですよ」と言って相手を包み込んで下さるような方なので、同僚の教員からは「慈しみの久間」と慕われていました。そういう久間先生を、黄教授は「いつも自然体で、無我ないしは静寂の世界を漂わせている方で、久間先生と一緒にいると、気持ちが自然と素直になり、落ち着いてくる感覚を覚えます」と評していました。

時代の流れとはいえ、久間先生のように泰然自若とした「古典的な学者」が大学から去られていくのは、寂しいかぎりです。29年間の長きにわたって、生活科学部、総合管理学部、そして熊本県立大学の発展にいろいろな形でご尽力して下さり、有り難うございました。移行教員の先生方が数十年にわたって蓄積されてきた良き伝統を、今後も引き継いでいきたいと思います。